

王太子さま、
魔女は乙女が条件です

登場人物
紹介

フィリップ

フロライユ王国の
国王。

イルベラ

フロライユ王国の王妃。
サフィージャとは
お茶飲み友達。

テュルコワーズ夫人

もと宮廷魔女で、
サフィージャの
有能な侍女。

ベネドット

フロライユ王国の大司教。
サフィージャを
敵視している。

エルドラン

フロライユ王国の枢機卿。
七年前、サフィージャに
命を救われた。

クァイツ

フロライユ王国の王太子。
夜会で出会った素顔の
サフィージャにひと惚れするが、
その正体が筆頭魔女だとは
知らず——!?

サフィージャ

フロライユ王国の筆頭魔女。
常に仮面をつけて
素顔を隠しており、
「恐怖の魔女」と呼ばれている。

第一章 王太子が現れた

そこは、美しい白亜の城だった。完全な円柱を描く塔、壮麗な石造りの城館。中庭には迷路のような木立が続き、あずま屋には美術品のような鉄細工のベンチとテーブルがすえてあった。

季節は冬、社交シーズンの真つ最中。

夜会から抜け出したサファイージャは、城の庭をさまよっていた。葉を落とした大木の陰に鉄のベンチを見つけて座る。その途端、金属のひんやりした感触が薄手のドレス越しに伝わり、背筋がぶるりと震えた。襟元をかき合わせながら、とにもかくにも落ち着ける場所があることにほっとした。彼女はひとりきりになりたかったのだ。

「……あーあ。くだらない」

サファイージャはひとり嘆息する。パーティーなんて大嫌いだ。なぜこんな道化のような格好をしなければならぬのか。重たいスカートをひきずり、ドレスの前身頃が美しく見えるよう何度となく手で直し、拷問器具のようなヒールでしずしず歩くことにいったい何の意味があるのか。

「私は魔女だぞ。こんなことをしているひまがあったら葉でも作っていたほうがマシ……」

怒っていたサファイージャだが、次の瞬間、絶句した。何気なく足を組んだ拍子に、ビリリと布地が裂ける音がしたのだ。

おそろおそろ太ももの下に手をやる。ドレスのお尻のあたりに、ベンチの鉄釘が引っかかっていた。スカートを引っ張ると、布地がさらに破れていく感触がして、慌てて手を止める。

「どうしよう……」

最悪だ。立ち上がれなくなってしまった。

無理に布地を引っ張れば、ドレスのお尻に大きな穴を開けてしまうことになる――

「だ、誰か……!」

声を張り上げてみたが、応えてくれるものはいなかった。ひとけのない場所を求めて、こんな風の強い夜に外へと飛び出したのだ。当然といえば当然である。

「情けない……」

涙が出てきた。

常に黒いフードをかぶり、顔を覆う垂れ布と仮面をつけて、人には顔を見せぬ神秘の魔女で通してきた。あまたの毒殺に関わっているとも、国王を裏から操っているともうわさされる『黒死の魔女』が、初めて出た夜会にうまくなじめずに敵前逃亡。それだけでも格好悪いのに、ベンチの鉄釘にドレスのお尻を引っかけて立ち往生とは、情けなさも極まれりではないか。

この上下ドレスに大穴を開けてもして、下着が丸見えのみともない姿で宮廷を歩こうものなら、これまで築き上げてきた妖しく恐ろしい魔女のイメージもガタ落ちだろう。

「楽しい王宮生活だったな……」

サファイージャはポツリとつぶやく。彼女は、宮廷で働く魔女だ。

魔女とは薬を作り、占いをする弱小宗教の女性のことだが、宮廷魔女の資格は容姿端麗で成績優秀、さらに社交の才があるものにだけ与えられる。

サファイージャはその地位を得るために、十五歳までひたすら努力を重ねてきた。

そしてついに宮廷魔女の証たる黒ローブを手に入れて、さらに職務に邁進すること六年。

先輩のお局魔女たちに目をつけられぬよう地味にふるまい、王都のならず者貴族たちに手折られぬよう生きてきた。

そうしてようやく押しも押されもせぬ『筆頭魔女』として取り立てられ、つい先日叙任式を済ませたばかり。

お妃さまのおぼえもめでたく未来は薔薇色順風満帆、これでようやく『野望』に一步前進したと喜んだ矢先にこの失態だ。

風が吹きすさぶ。飲酒でほどよくほてった体が一瞬にして冷やされていく。

このまま凍死するのと、穴開きドレスでそそくさ退散するのと、どちらが不名誉だろうか。

そんなことを考えていると、ふいにしげみをかきわける音がした。

「だ、誰か、誰かそちらにおられるか！」

必死に声を張り上げると、木立の奥からすばらしい美男子が顔をのぞかせた。

夜の闇の中でも輝かんばかりの白皙に、抜けるような透明感のある金の髪。どんな女性でも息をのまずにはいられないほど形の整った切れ長の目、彫刻のようにすらりとした手足。カーネリアン

に似た緋色の瞳は、かがり火の光を受けて赤々と燃えている。

「クアイツ王太子殿下……」

思わず彼の名前を口走ると、当人は不思議そうな顔をした。

「あなたのような美しい女性にお見知りおきいただいて光栄ですが……初めてお会いする顔ですぬ」

普段はフードを深くかぶり、顔を覆う垂れ布と仮面をつけて顔を隠しているサファイージャだが、さすがに夜会でそのような格好をするわけにもいかない。今は普通の令嬢のようにドレスを着て、素顔をさらしていた。そのためクアイツは誰だか分からなかったようだ。

クアイツは、緑豊かな大地と華やかな宮廷文化を誇る、このフロライユ王国の正統なる王位継承者である。国事などで何度も顔を合わせている相手なので、サファイージャが名乗ればクアイツも得心がいくだろうが、それは矜持が許さなかった。

初めて出席した夜会でドレスがまぶしいことになり、泡を食っている女。それが恐怖の宮廷魔女だなんて知られたら、格好が悪すぎる。ふと、意味ありげにニワトリの心臓を握りつぶす儀式の最中、「あいつこないだ尻丸出して歩いてたんだぜ」と忍び笑いをもらす貴族連中の姿が目につかぶ。

焦りながらも、サファイージャはなんとか返事をした。

「え……ええ」

「ああ、お姿ばかりかお声まで鈴を転がすような美しさだ。お名前をおうかがいしても？ 白百合のような方」

さすがは淑女たちの間で「結婚したい男第一位」と呼ばれる王太子殿下。珍妙な女にも、なんと優しく丁寧に話しかけることか。浮き名の一つも流れない彼は、臣下からの信頼も厚く、いずれ賢王になるだろうと言われている。天下泰平、すべてこの世はこともなし。彼に気に入られるようひそかに画策している連中はかなりの数にのぼる。

そんな人物に弱味をさらしたくない。サファイージャは見栄を張りたいあまり、

「……アインホア……」

と、とつさに偽名を使ってしまった。

「南方の名前ですね。いったいどちらの？」

「……ええと……ディアル又公の親戚筋……ですわ」

声色まで変えて、清楚な乙女を演出する。

「そうですか。南の方にはこの国の風は冷たいかと……さあ、私とともに戻りましょう。どうぞお手をこちらに」

「い、いえ、そんな、結構ですわ……」

「どうしました？ ご遠慮なさらず……」

物やわらかな口調ながら強引な手つきで抱き寄せられて、高価なドレスは甲高い悲鳴を上げて眠した。絹布の裂けるすどい音が響き、クアイツの顔がさつと青さめる。

「なんてこと……お詫びしてもしきれません。女性の衣服を力任せに裂いてしまうなど……」
クアイツはおのれのせいだと誤解したらしい。

「すぐに代わりのドレスを用意させましょう。さあ、今はこちらをお召しになってください、美しい方」

彼は羽織っていた上衣を脱ぎ、サファイージャの肩に着せかけてくれた。豪華な衣服だ。ちりばめられた刺繍や胸に並ぶ勲章ですしりと重い。

「立てますか？ 私の腕をお貸ししましょう……」

「え、ええ……でも……」

着替えを用意させるということは、クアイツと一緒に王宮の回廊を抜けるということだ。誰もが憧れる美形の王太子殿下が衣服の乱れた女を連れて歩けば、人は当然、「あのものは誰か」とささやき交わすだろう。一夜にして注目の的になってしまう。その上、侍女や小姓を呼ばれたなら、上を下への大騒ぎになること間違いなし。それは大変に都合が悪い。

「結構です。侍女をひとりよこしてくださいれば十分ですわ。わたくしここでお待ちしております」

「なるほど。あなたは、私とうわさになるのを恐れていらっしゃる」

「ええ……」

「お美しいだけでなく思慮深いあなたにとって、私とうわさは不名誉なことでしょうか」

「いいえ、そういうわけでは」

サファイージャははつとした。いらぬことを言って、クアイツのプライドを刺激してしまったようだ。誰もが愛し、かしく彼にとつて、女のほうから拒絶されるのは屈辱だろう。

「わたくし、王太子殿下とはとても釣り合いの取れぬ身ですもの……殿下とご一緒におりましたら、

嫉妬で淑女の皆さま方に呪い殺されてしまいます」

とっさに取りつくろうと、クアイツはくすりと笑った。彼のことはそれなりに見知っている。世辞は嫌いでない性質だ。むしろ無粋なものや愚直なものを厭う。

「それにわたくしも、殿下とこれ以上一緒におりましたら、苦しくなってしまうです。だって、こ、恋に落ちてしまいそうなんですよ」

あれ、どもった。なんでだろ。

どうも彼の前だと調子が狂う。

宮廷では、魔女は男に言い寄られても如才なく立ち回ることがマナーとされている。基本的には上手にかわすべきなのだが、平民出の宮廷魔女にとつて、貴族との婚姻は憧れだ。さっさといいところのお坊ちゃんを捕まえて魔女をやめてしまうものがあとを絶たないため、魔女の平均年齢は驚くほど若い。

十五の歳から出仕して、二十一になった今でも職務ひとすじな魔女は、サファイージャくらいのものだった。

「恐怖の魔女」と呼ばれる前は、あまたの貴族の誘惑をかわしてきたサファイージャだ。そんな彼女の舌先三寸に、王太子殿下は目を細めた。

「……あなたが私と同じ想いでいると知って、この心臓は壊れそうなほど高鳴っています」

情熱的なセリフが耳元でささやかれた。このくらいはまったく珍しいことではない。今までにも何度となく男に言い寄られ、そのつど何気ない調子を装って拒否してきた。

「暗がりにひとり佇むあなたを見て、初めは亡霊かとわが目を疑いました。なにせ、あなたの肌は夜の闇の中でも輝くように白く、この世のものとは思えないほど美しかったから」

いつものお世辞、いつもの退屈な貴族のお遊び……そう自分に言い聞かせながら、サファイージャは唇を噛んだ。優美を体現したかのような彼だが、そのど元は意外なほど男性らしかった。サファイージャは、それをどこかうっとりとした気持ちで見つめる。

「この作り物のように愛らしい唇に、確かに血が通っているのだと実感させてはいただけませんか？ でないと私は、いもしない亡霊の夢を見ているみたいで落ち着かないのです」

クアイツの筋張った指がサファイージャの唇をなぞる。

「……温かい」

クアイツはため息をついて手を離し、いとおしげにサファイージャの指先へキスをする。

ゾクリと肌があわ立つのをこらえて、サファイージャは必死に平静をよそおった。

宮廷における男女の作法に従い、拒絶するときの合図を送る。頬に指を二本立てるのが、『今はダメ』という意思表示だ。

「……お許しください、殿下……」

クアイツは静かにこちらを見下ろしている。うつむきがちな彼のカーネリアンレッドの瞳が、面白がるように燃えていた。

「わたくしには操を立てるべき方がおります」

彼の誘いをおかすため、サファイージャは口からでませを言った。

宮廷魔女は生娘きむすめでなければ務まらない。サファイージャは宮廷の筆頭魔女という地位に身も心もささげているため、あなたが間違いではないのかもしれない。

「……侍女をあなたのところへ向かわせましょう」

そう告げると、クアイツは身をひるがえした。

——助かった。なんとか窮地きうちを切り抜けたようだ。

サファイージャは冷たい夜風にぶるりと身を震わせながら、上衣アビのあわせをかき寄せた。クアイツがつけていた、新緑に似たさわやかな香水がふわりとあたりを満ちる。

美しい指先が自身の唇をなぞった感触を思い出し、サファイージャは少しだけ残念にも思った。

「本当に、惚れ惚れするようないい男」

あれは女を破滅させるたぐいの美しさだ。彼に愛されたいと願うあまり、すべてをささげて尽くそうとする女性があとを絶たない——そんな人相をしている。

ドキッとしたり、一瞬、本当に恋に落ちそうになった。

「……まだドキドキ言ってる」

魔性まじやうの紅い瞳を間近で見つめたなごりが、サファイージャの心臓のあたりに残っていた。

侍女に案内された客間には、先客がいた。

マホガニーのテーブルに置かれた燭台しょくたいが、男の顔を浮かび上がらせる。

「……王太子さま……」

待ち伏せされていたのか。でも、なぜ？ 王太子は女遊びをしないことで有名だ。さきほどサファイージャが庭で受けたような世辞を絶やさないので、国中の乙女が彼に憧れているが、誰も深い関係にはなっていないはず。

妃きをめとらず、女官もつけず、華やかな令嬢の出入りする社交界には深入りせず——と、一切女性を寄せつけずに過ごしてきた方である。

「無粋ぶすいなまねをすとお思いでしょうね」

「いえ……驚いてしまって。王太子さまは、女性がお嫌いなのかと思っていたものですから」

「まさか。そんなことはないよ」

「でも、恋人をお作りになったことのない王太子さまが、どういってお心変わりでいらつしやるのかしら」

王太子は、乙女を籠絡ろうらくする吸血鬼のような顔で薄く笑った。

「どういうわけか、あなたは私のことをよくご存じのようだ。ディアルヌ公の親戚筋のお嬢さん？」

ぎくりとした。偽名であることがばれたのだろうか。

「昨日今日初めて社交界に出てきたにしては、ずいぶん垢抜けていらつしやる。しかし、私はあなたを一度もお見かけしたことがない。いそぎ、招待客のリストからあなたの名を探させました。するとどうだろう、どこにもアインホアなどという名前はなし。名を偽りいつはり、あなたは何をなさろうとしているのかと、疑問を抱いたのです」

サファイージャの背中を冷たい汗が流れ落ちた。冬だというのに窓が開いていて、そこから吹き込

む風が体を冷やす。

初めて出た夜会であぶれてしまい、ドレスもダメにしてしまった。

恐怖の魔女だというのに、そんな残念な状態なのがかつこ悪くて嘘をつきました、などとはとても言えない雰囲気になってきた。

窮地を切り抜ける言い訳を必死に練っていると、再び風が吹き、王太子の背後でろうそくがいくつか消えた。

闇を増した空間に、クアイツの緋色の瞳が光る。

その構図があまりにも似合すぎていて、サファイージャは言葉を失った。

「宮廷のマナーも心得ておいでのあなただ。すでにどなたかのものになっているのでしょうか。お相手は高名な貴族の方。あなたはその方に操を立てたくて、私を袖にした。違いますか？」

「いえ……いえ」

よかつた。なんだかよく分からないけど誤解してくれている。正体を怪しまれてはいるようだが、バれているわけではない。

ひとまず話を合わせておいて、すきを見て逃げてしまおう。

「あなたの夫君が心からうらやましい。こんな気持ちは生まれて初めてです。聡明でうるわしいあなたにそこまで思われているなんて……なぜその相手は私ではないのでしょうか？」

なんだかひとりで盛り上がるクアイツ。サファイージャは後ずさりながら必死にツツコミを我慢した。

なぜもなにも、そんな相手なんていせんがな。

「ああ、その唇が火のように熱いことなど知らないままでいたかった。あなたとの道ならぬ恋に燃え上がった哀れな男をどうかお笑ください。そして救ってはいただけませんか」

王太子に手を握られる。サファイージャは思わずつばを呑んだ。

美しい男とは指の先まで美しいのか。すらりと長く整った指をしているが、関節は男らしく骨ばっている。

この汚れたところのないぴかぴかの爪の先で唇をなぞられていたのか……と思うと、なぜか胸が高鳴った。

「……指が冷たくなっていますね。暖炉のそばにいらっしやいませんか。毛布をお貸ししますよ」
サファイージャは迷ったが、暖かい火の気配には勝てなかった。

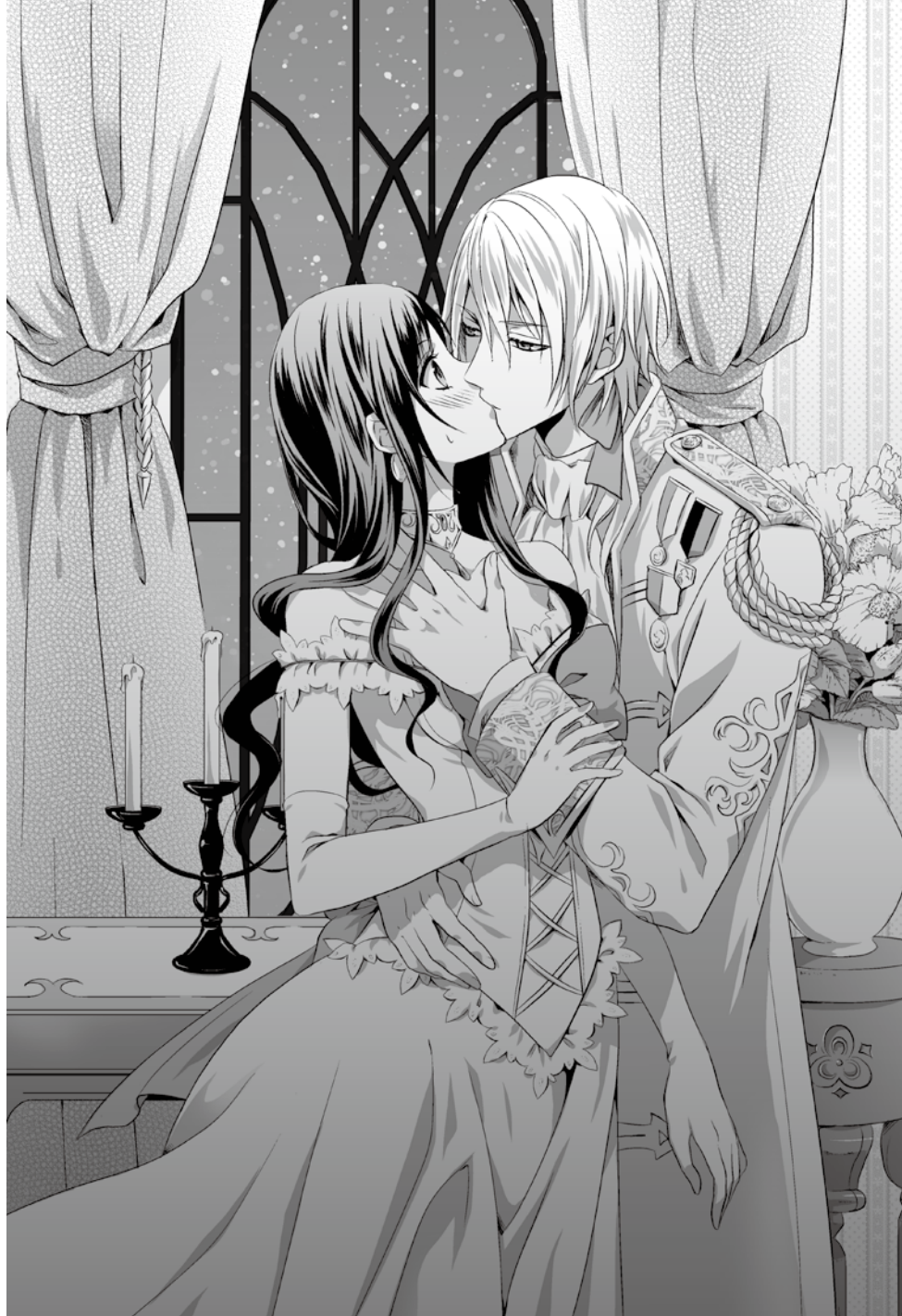
さきほどから寒さが限界で、がちがちに震えていたのだ。おしゃれな薄手のドレスは冬に向いていない。

毛布をふわりと着せかけられ、背中から抱き締められた。わーい、あつたかくてきーもちいー。
って、ダメじゃないか！

しかし今のやりとりでようやく話が見えてきた。要はサファイージャを既婚だと勘違いし、その上不倫をしませんかと誘われているのだろう。

「王太子さま……いけませんわ」

「こうしませんか。あなたはアインホアで、この部屋にはあなたひとりしかいなかった。誰も私の



姿は見えない。あなたは誰にも会わなかった……ただ、一夜の夢を見る。甘い天国の夢です」

「こ、こまりま……んんっ……」

初キスだと騒ぐひまもなかった。ぶちゅつとやられてちゅーつと吸われる。背中がゾクゾクして、サファイージャはその場で倒れそうになった。

熱い唇が強く押しつけられ、小鳥のように何度もついばまれる。

「ん……、……ゆるし、……ください……っ、んん、んんっ……」

さんざん唇を犯されたあとにようやく解放されると、サファイージャは少し涙目になっていた。胸の中で悔しさと混乱が嵐のように吹き荒れる。

——か、堅物王子のくせに、なんつうキスをするんだ！

うっかりちよつと感じてしまったではないか。腰が抜けるかと思った。

「なんてうぶな反応をなさるんですか、あなたは……ますます離したくなくなってきました」

クアイツは熱くささやいて、サファイージャの唇をふたたびふさいだ。舌がゆっくりと差し入れられる。サファイージャの口の中に、ヌルリとした舌の感触が広がっていく。

執拗しつぱうに口の中をむさぼられるうちに、じわりと下腹部が濡ぬれてくるのを感じた。サファイージャはくたりと体の力を抜く。

「困ります……」

本当に困るのだ。

宮廷魔女は生娘きむすめでないといけない、という規律がある。

といつても、実際に契り(ちぎ)を交わすことを禁じているわけではない。宮廷魔女ともあろう娘が、恋人を持ってチャラチャラすることなかれ、という程度の意味だが、筆頭魔女である自分が率先して規律を破るのはどうなのか。

それに、劇薬を扱い、他人の命を預かる魔女は、偏見の目を向けられることもある。処女性をうるさく追及し、異端だなんだと取り締まりをしたがる過激な団体もある昨今、何かの拍子にサファイジャが生娘でないとバレれば、窮地(きゆうち)に立たされることになる。

「わたくしはほかの方を真実愛しております……」

なおもそう言ったが、王太子はあきらまなかった。

「あなたは義理堅くて、けなげな方だ。そんなあなたの様子を見てみると、ますます焦(こ)がれてしまいます。どうにかして手に入れたいと思ってしまう……」

強引な男め。しかし、嫌味がなく格好いいから始末に終えない。クアイツの、いかにも真剣そのものといった訴えを聞いていると、なんだか妙な気持ちになってくる。

サファイジャは星占いも行っている。ときには政治的な助言を乞われることもあるし、自然と様々な人間の秘密に触れてしまう。これまでにも、一見清楚(せいそ)な令嬢から墮胎(たうたい)の相談を持ちかけられたり、理想の君主と人々にあがめられる男から、趣味の人殺しをやめたいという相談を受けたりしてきた。だからもうどんな人間にも幻想を抱かないつもりだったが、クアイツだけは別だった。

こいつ、じつは遊び人だったのか？ と、サファイジャは裏切られた気持ちで考えた。

王太子のプライベートについてもよく知っていると思っていた。どこから見ても疑いようのない

くらい清廉潔白な男だ。抱かれない男第一位ながら女にうつつを抜かさないところは好ましかった。きつと純情で義理堅い男なのだろう……そんな男が貴族たちを引っ張ってくれるのなら、腐りきつたこの国も少しはマシになると期待していた。

ひよつとして、このいかにも誠実そうな態度は演技なのだろうかという不安が胸をかすめる。恋愛経験のないサファイジャには、彼の振る舞いがとても遊び慣れているように見えてしまったのだ。

「……王太子さま、王太子さまのお慈悲に免じて、わたくしを見逃してください……この身をこれ以上お求めになるのでしたら、わたくしは……」

「どうぞ好きな言葉で私を鞭打(むちう)ってください……私はもう、あなたを手に入れることしか考えられない……」

サファイジャは深刻に焦り始めていた。息がかかるほど近くにクアイツの温かい体があつて、力強く抱き締められている。みがき上げられた象牙(ぞうげ)のような肌、珊瑚(さんご)にも似た厚い唇。女なら絶対に見とれてしまう男だ。ただ近くにいただけでクラクラするほど扇情的なのに、耳元で愛をささやかれていると、頭がおかしくなりそうだった。

背中をまさぐる指がコルセットの紐に触れ、不慣れな手つきでそれを引き抜いていく。そのぎこちなさに違和感を覚えたが、深く考える余裕はなかった。

あつという間にドレスの胸元を引き下げられ、胸があらわになった。

「かわいらしい蕾(つぼみ)だ……こんなに硬くなっている」

白い丸みのでっぺんで、赤い突起がツンと上を向いていた。

や、やめろ、そんなところをいじるなっ。
あやうく汚い言葉でののしりそうになる。

「本当に……、もうやめ……」
後ろから胸をわしづかみにされ、突起を指の腹でもてあそばされる。誰にも触らせたことなんてないのに。

クアイツは、こうやって色んな女を抱いてきたんだろうか。
ゾクリと背筋からかけ上がってきたのは、おぞましさだ。そうだ、自分はこんな愛のない接触で感じてなどいない。

しかし、うなじや耳にキスをいくつも降らされて、サファイージャは一瞬気が遠くなった。

「ひ、人を呼びますよ……！」

思い余って叫んだ唇を、苦笑するクアイツにふさがれる。

「ふ……くっ……うっ……んあ……」

唇を甘噛みされながら胸をいじくり回されて、息もできない。

「かわいい人だ、あなたは。私が誰だかお忘れですか？ この国の王子ですよ。こんなところを目撃されて困るのはあなたと……あなたの夫君だ」

それもそうだ。筆頭魔女が王子といちゃついているところなど見つかったらおしまいだ。確実にクビだろう。クビで済めばまだいい。最悪、王子を誘惑した罪で教会に難癖をつけられ、異端審問。そうなれば火刑台行きは確実だ。

魔法女！
ざあつと血の気が引いていく。なんとかして切り抜けないと。考えろ、考えるんだ、黒死くくしの

ぐるぐると頭を回転させているサファイージャをよそに、クアイツの手は、慈いづくむように体を撫なで回している。少しずつ上半身が裸にされていく。

背中からドレスが脱がされて、あらわになった背骨にくちづけをされた。びくんと大げさに跳ねてしまったのは驚いたからだ。断じて気持ちよかったわけではない。

こつりと歯を当てられて、ぞくぞくと背中がのけぞった。

「ん……ッ、く、う……！」

声こゑが漏れそうになるのをこらえ、必死に頭を働かせる。いつそ魔女だとカミングアウトするのはどうだ？ 名を明かせないと断りを入れたら、いくら王太子といえど無体な真似は……

……いや、ダメだろう、それは。今日の夜会に招待されている魔法の数なんて、たかが知れている。リストをたどったらいずれ正体もバレるに違いない。

「何を考えているのですか？」

集中していないのが伝わったらしく、クアイツの紅あかい瞳まなこにらみつけられた。甘い目尻がつり上がり、人相が微妙に変わる。そんな顔つきも似合っているのだから、色男は得だ。

「あなたの瞳はまるで硝子がらすのようだ。ひどく美しいのに、私を映すだけで見てはくれない……」
切なげな声でささやかれた。

なんて口のうまい男なんだ。思わず胸がうずいてしまったじゃないか。

演技でこんな声が出せるなら、いい役者になれる。

「この胸も……こんなに温かいのに、あなたはひどくつれない」

妙に熱い手のひらが、やわやわと胸を揉みしだく。

軽い力でつぺんを弾かれ、肩がビクリとした。

気持ちがいいだなんて絶対嘘だ。

認めたくなんてないのに、知らず知らずのうちに下半身がむずがゆくなっていく。

「だって……愛してもいない殿方しんがたとなんて……嫌に決まっていますわ……もう、触らないでくださいな……」

そう言うものの、指先で軽く胸をこすられると、強がることができなくなっていく。

やっぱりちよつと気持ちいいかも。

ぷっくりと肥大した先端を何度も指で転がされ、浅い吐息がこぼれ出る。はっはつと不規則に息をつくサファイジャを、クアイツは目を細めて見つめた。まるで視線で犯されているみたいだ。

「嫌だと言いながら、そんな誘うような顔つきを男に見せるんですね……ご自分で分かりませんか？ あなたは今、ひどくいやらしい目で私を見つめている……そんな目をするあなたが嫌がつているはずがない。ほら……」

「う……」

体を横に動かされ、鏡を見せられる。そこに映った自分の顔は、信じられないほどだらしなかつた。

「いや……」

「目を閉じないで……きちんと見てください。きれいな顔が赤らんで……涙が浮かんでいる。ひどく男を誘う顔つきだ……私はもう我慢ができなくなりそうです」

目を閉じててもクアイツの声からは逃れられない。執拗しつごうに吹き込まれるみだらな言葉が辛かった。

魔女と呼ばれて恐れられていても、恋愛経験はない。そこは世間の乙女相応に、傷ついたり恥づかしかったりするのだ。

信じられないことに、いつの間にかサファイジャは追いつめられ、泣きそうになっていた。

クアイツの唇が、肩のあたりを歩き来する。肌に触れるか触れないかのところをたどられて、腰が思わず浮き上がる。

腰の下に手のひらが差し込まれた。太ももからお尻にかけて、ぐにぐにと揉みつぶされる。

「や……、やめ……、怖……ひゃあっ！」

腰が引けているサファイジャにはお構いなしで、クアイツはドレスのスカートをまくり上げた。足、あしが見える！ やめて！ やめろつたら！

サファイジャはとっさに自分の口を手でふさいだ。もう少しで罵声ののしりが出るところだった。

恐怖の叫び声を無理やり抑え込む姿は、どう見ても生娘きむすめの反応でしかないはずだが、クアイツは気がつかないのだろうか？

「可憐かわれに恥じらうふりをして……あなたは本当に誘い上手ですね。うっかり引き込まれてしまいうになる」

あー。分かってなかったかー。そんな気はしてたー。

サファイージャはもうやけくそになって、ぶんぶんと首を横に振った。口を開いたら、情けない涙声で取り乱してしまいう気がして怖かった。傷つき混乱するサファイージャの気持ちなどお構いなしに、クアイツはとろけそうな甘い笑みを浮かべている。

「やっぱり……すごく濡れてる。ほら……」

下腹部のさらに下にある裂け目を硬い指がこすり上げた。粘り気のある甘い感触が、おなかの中心に向かってかけ上がる。

一番人に触れられない部分を無遠慮に暴かれた恥ずかしさで、サファイージャはのどをつまらせた。

「……や……、やめて……」

誰だお前。

涙声で懇願している自分に、自分で突っ込んだ。情けない。これがあの黒死の魔女か？ こんな姿、絶対に他人には見せられない。

硬い指が少しずつ押し入れられる。これまでに味わったことのない異物感に、また泣きそうになった。

太い指が中でぎこちなく動き、やわらかいひだをかき回す。

「ひ……んん……」

中をこする生々しい感触に、得体の知れない心地よさが入り混じる。

こんなこと絶対にありえないと思っっているのに、なぜ中がひくついてきて、めちゃくちゃにかき回されなくなってくる。

「あ……だめ……く、う、う……んんっ……！」

粘膜のやわらかい内壁をこすり上げられて、くうんと子犬のように鼻が鳴った。

「な、んか……だ、だめ……あつ、や、やあつ……！」

「声色が変わりましたね……ここをこうされるのが好きなんですか？」

男の硬い指がちゅぷちゅぷと音を立てながら上下した。ひどくじれったい感覚が突き上げる。

「や、あ、ああ……あう、ううううっ……！」

やめて、そんなところ、自分でもいじったことないのに！

そう言っって頭のひとつもひっぱたいやりたかったが、行動に移したら、確実に不敬罪でお役御免だ。

男の吐息が首筋にかかる。熱く弾んだ彼の呼吸がくすぐったくてたまらない。

なんとかしないと！ 王太子さまの機嫌を損ねず、あとをにごさず、やんわり感じよく断る方法を考えるんだ。

思考を集中させようとしても、体のほうに意識がいつてしまう。さきほどからいじられている部分が熱くてたまらない。勝手に腰が動いてしまう。

「気持ちいいですか？ あなたは感じるのが上手な方ですね……そんなに腰を押しつけてこられる

と、私も辛いのですが……」

さきほどから、硬いものがお尻に当たっている。快感で体が跳ねるたびにぐいぐい食い込んでき
てちよつと怖い。

「お……、押しつけて、なんか……」

弱々しく否定すると、それがクアイツを刺激したらしく、さらに指を一本増やされた。

すさまじい圧迫感で頭が真っ白になる。策略を巡らせることなどできそうにない。

ぐちゅぐちゅと裂け目を指で犯され、強烈な快感が背筋をかけのぼる。

「あ、あつ、はあつ、あん、んん……」

中で指が暴れるたびに声が跳ねた。

何あえいでるんだ気持ち悪い！

自分で自分に鳥肌を立てつつ、でもやっぱりこらえきれない嬌声きょうせいが勝手にのどの奥からあふれ
出て、サフィージャは困惑した。

激しく抜き差しされる指先が、感じるところをかすめていく。その感触にとろとろと溶けてしま
いそうだ。

「麻薬のような声だ……あなたは私の心をかき乱す。もつと聞かせてください……私を受け入れ
てくださいから、きちんと整えてさしあげたいのです」

う……受け入れる、だって？

相変わらずお尻には硬いものが押しつけられている。その上、それはちよつと動いているのだ。

クアイツも必死に抑えているが、どうしても止まらないのだろう。

これを受け入れるのか。サフィージャはいらない想像をしてしまい、ふるぶると体を震わせた。

きつと痛いに違いない。指二本でもかなり辛いのだから。

でも、こんな大きなものをゆつくり動かされたら……

想像だけでおなかの底がきゅんとうずく。

「あああつ……！ は、はあつ、だ、だめエ……！」

「……ッ、急に締めまりましたね。熱くてやわらかくて……溶けそうです」

やめろ、考えるな！

硬いものが尾骶骨びていこつのあたりをぐりぐりと刺激する。

クアイツから色っぽい息が聞こえてきて卒倒しそうになった。

他人の欲望をあからさまに見せつけられているようで落ち着かない。

ものほしそうに押しつけられるクアイツの下腹部から必死に気をそらそうとした。

でも。おおきい……

クアイツは生ける彫刻のような男だ。生気などまるで感じさせないのに、そこは生々しい熱を帯
びている。いったいどんな形状をしているのだろう。よこしまな想像が先走り、知らず知らずのう
ちに口内につばがあふれた。

こくりと嚙下えんげした音に気づかれたらしく、耳元でくすりと笑われる。

その艶つぼさに、ゾクリと体がわなないた。

「ああ……あなたのこの体を夫君が独占しているかと思うとやりきれない。全部私だけのものにしてしまいたい……」

甘い嫉妬まじりのささやきに、サファイージャは激しく身悶えた。

こ、この男は危険だ。うっかり愛されているような気分になってしまおう。

「ひと目見た瞬間に、あなたが特別な女性だと分かりました。私は生まれながらに何もかも与えられてきた……だからこそ、誰かを選ぶ気にはならなかったのです。愛してもいない女性を抱くことなんて考えられなかった。誰かをほしいと感じたことだってなかった……」

甘いセリフとともに、乳首を弾かれる。

ひどく感じる突起をくにくにと揉みつぶされて、全身がビクンと震えた。

「そんなの……嘘ですわ……、はあんっ……」

だまされないぞ、男は皆そう言うんだ。被害妄想でじわりと涙を浮かべつつ訴える。

全身の毛を逆立てる猫のように、キツとにらみつけた。

「信じていただけないのも無理はない。しかし、とにかく初めてなのです、こんな気持ちは……胸が張り裂けそうなほど、激しい想いは……」

クアイツは赤く色づいている先端をきゅつと強くつまみ上げた。

「んあ、はあっ、ああっ……!」

体が斜めに大きく傾き、クアイツに首筋をさらしてしまおう。

クアイツの熱い舌が首筋を熱心に舐め上げた。髪に顔をうずめ、幸福そうにため息をつく。

「私の愛しい人……できるなら、誰よりも早くあなたと出会いたかった。恋を知ったその日に、永遠に叶わぬと思い知らされた私の気持ち、あなたに分かるでしょうか。せめて体だけでも奪いたいと願ってやまない、この身勝手な思いが」

本当に身勝手ですねッ!

「……ひどい人……体を奪ったって、わたくしの気持ちまでは奪えませんか……」

ようやく筆頭魔女になれたんだ。長い間の夢だったんだ。

こんなところでクアイツと親密すぎる体のお付き合いをしては、今後の行動にも差しさわりが出る。何かのきっかけで素顔が露見したら、その時点で魔女としてはおしまいだ。

王太子としても、自分が気まぐれに手をつけた娘をそばに置いておきたくはないだろう。適当な理由をつけて放逐するに決まっている。

考えている間にも、指先が無慈悲にうごめいて、下半身をびりびりとしびれさせた。こんな感覚は生まれて初めてだ。これまで奥深くに何かを挿入したことなどなかった。奇妙な感覚がおなかを圧迫する。

「んん……っ、……見逃してくださいまし……ほかのものならなんでもさしあげますわ。でも体だけは……どうか触れることだけはおやめください……」

なんのひねりもない懇願が口をつく。もう必死だった。涙が流れて息もたえだえ、胸は苦しいし頭は真っ白。なのに、触れられると魚のように腰が跳ねてしまおう。

「おかしなことをおっしやいますね。私に手に入らないものなどありませんよ」

ですよねー。知ってた。

彼はいっぱいいっぱいサフィージャを見て、満足げに笑う。

わがもの顔でサフィージャの耳をついばみ、いたぶるような調子でささやいた。

「もう思考がまとまらなくなってきましたか？ ……舌つたらずなあなたも私の好みです」

ううっ、喜ばせてどうする。もっとしつかりしゃべらないと。こらえ性のない口を必死にふさいで、首を横に振る。

「んっ……、……ッ、……くあっ……」

努力もむなしく、あつという間に悲鳴が漏れ出る。

キスで唇をびったりふさがれながら、ゆるゆると裂け目に指を出し入れされ、我慢が限界にきてしまった。やわらかい舌に口内をかき回され、まざりあつた唾液が垂れる。

もうろうとした意識を引き裂くようなするどい快感。断続的に背骨が震えて、力が抜けた。

「なんてやわらかい体なんだ。あなたはどこもかしこも砂糖菓子のようにですね。乱暴にしたら、壊れてなくなってしまうそうだ……」

容赦なく穴をほぐしにかかっておいて、何を言ってるんだこいつは。

サフィージャは悔しまぎれにクアイツの横つ面を張つてやりたい気持ちになった。すんでのころで踏みとどまれたのは、それ以上に自分を殴りたい気持ちだったからだ。

だいたいな、こんな指をどっふりと呑み込んだ状態まで持ち込まれといて、嫌だと主張しても説得力がないじゃないか。

「ふ……っ、……んん……んう、うううっ……！」

中をゆすられるたびに媚びたような鼻声が漏れて、視界がぐにやりと狭くなる。

ち、違う。感じているわけではない。酔っているのだ。ワインが悪かったんだ。

気持ちとは裏腹に、体が勝手にほてっていくのがおかしかった。まったく抵抗ができていないことも、サフィージャのプライドを粉々にした。自分はこんな、抑制がきかなくなるような愚かな人間ではないのに。

「どんどん濡れてきますね。夫君はこんな甘いものを毎日味わっているのか……」

あざけり半分、嫉妬半分の揶揄を吐いて、いらだたしげに肩口に噛みつく王太子。

少し腹を立てたふうの動きが、サフィージャの胸をぎゅっと締め付ける。とろりと酔わされかけて、サフィージャはハッとした。

何を切なくなっているんだ、正気を取り戻せ！

泣く子も黙る魔女が、低級の動物霊に取り憑かれたような有様だなんて。

「ああ……あなたは素直に体を預けてくださるのに、あなたの愛はこんなにも遠い。私だって、本当はこんなことをしてあなたをはずかしめたくはなかった……」

ならやめてくれ。今すぐ、即刻、すみやかに！

突っ込みつつ、何かが引つかかった。

ん？ 愛？ そ、それだー！

愛の証を立てろ、と無茶振りするのはどうだろう。

大事にするのが愛だと、とにかく良心に訴えかけるしかない。私を愛しているならこんなことはやめと、はつきりきっぱり言っただけ!

「ほっ……本当に、わたくしを、あ……愛して……らっしやいつ……、ますか? 神に誓って?」
むね、胸をいじらないでほしい。人がしゃべっているのに。

「神にかけてあなたを愛しています」

そう言わせるように仕向けたはずなのに、実際に言われると、なぜか胸がざわめいた。サファイアはそんな自分に不安を抱く。や、安い。ちよつと安すぎるんじゃないか、自分。そんなに男に飢えているのか? しっかりしろ、正気を保て!

「でしたら……っ、わたくしを、妃ハイクに……迎えてくださいますか?」

「もちろんです」

即答かー!

少しは迷ったり悩んだりしろー!

彼の妃の地位はもちろんお安くはない。平民ふぜいはお呼びでないのだ。

「んんっ……、信じられ、ません、わ……わたくしの……本当の姿も知らないくせに……」

そもそもサファイアは貴族でもなんでもない。自分の正体があの黒死の魔女だと知られたら、クアイツに失望されるのではないだろうか。あんなかわいげのない下賤げだんの娘など願ひ下げだとはかりに軽蔑けいべつを込めた目で見られでもしたら、立ち直れないかもしれない。

「つれないことをおっしゃいますね。名前も教えてくれないあなたに責められるいわれはありません

んよ。もつとも、あなたが何者であろうとも、私の想いに変わりはありませんが」

「あなたは……愛する女性、に、こんなっ、……無体をなさっ……、るの……? ひあ、あ
あっ……!」

立てた指で乳首をひねり上げられた。ふるふると震える胸のてっぺんをぐりぐりと刺激され、最後まで言えずに嘔おうんでしまった。

「あなたが誘ったではありませんか。あなたがどうしても嫌がるようなら、私だって無茶はしな
かった。あなたがいけないんですよ。恥じらうふりをして私を焚たきつけるから……」

ええい、ふりじゃなくて本気で恥じらってるんだ。少しは分かれ!

「わ、たくしを愛して、いらっしやる、の、なら……、どうか、どうかこの場合は、お収めになって、
くださいまし……っ」

「そうですね……」

彼は考えるようにつぶやいた。

しつこくいじくり回していた手が、胸から離れた。

下からもゆっくりと指が引き抜かれる。

さびしいような感覚におそわれ、サファイアはおののいた。

違う、違うんだ、嫌がつてるのは口だけとかそういうんじゃない!

急に解放されて、サファイアは思わずクアイツを振り返る。

納得してくれたか……?」

ぼやけた頭で、クアイツがベストやシャツを脱いでいくのを見守っていたが、荒い息が収まるにつれ、青くなった。

全然人の話を聞いてないだけだったー！

や、やられる。

クアイツの気まぐれのせいで、せっかくの将来設計が台無しになってしまう。

もう感じよくとか言ってる場合じゃない。殴り倒してでも逃げないよ！

サファイージャはよろめきつつも立ち上がる。コルセットが乱れてぐちゃぐちゃだったが、そんなことに構っているひまはない。脱げかけている服をかき抱き、サファイージャはふらふらと逃げ出した。

だが、やわらかいじゅうたんを履きなれないヒール、それに力の入らない足が邪魔をして、いくらも行かないうちによるめいた。

「あつ……！」

どざりと転倒した体に、クアイツの影がかぶさる。

「……お……お許しを……」

かたかたと体が震えた。

「女性をしいたげる趣味はありませんが……あなたの悲鳴は、なぜか私の心をざわめかせますね。抵抗しても無駄ですよと言つてさしあげたくありません」

慈愛のような、恥じらいのような、なんともいえないやさしげな笑みで見下ろされる。

ぞつとした。

最大派閥の後ろ盾を持つ魔女として、もう怖いものなど何もないと思っていた。しかし、それは思い上がりだったのかもしれない。

ここから逃げ出せるなら、魔女の地位なんて捨ててしまっても構わない。そう思ってしまうほど、目の前の男が怖かった。

本名がのどまで出かかると。

声にならずに消えたのは、あきらめきれない夢があるからだ。

疫病をこの世から駆逐する。

その『野望』のためにはどんなことだつてすると誓った。誇りはまだ消えていない。

こ、こんなやつに、こんなやつに屈してたまるか！

「ち……近づかないでくださいませ。それ以上わたくしにお手を触れるのでしたらお覚悟を。わたくしには自害の用意がございます」

スカートの内側に、毒を隠し持っていた。鉱物から取れる劇薬だ。大量に服用すると、疫病のような症状が出る。普通の人間には、疫病かそうでないのか、症状の見分けがつかない。

もちろん、単なるこけおどしで、本当に飲むような勇気などなかったが、クアイツを動揺させるには十分だろう。

「あなたという人は……」

クアイツが瞳をかげらせる。

「まずまず私のものにしたくなりました。……もどかしいものです。あなたの素晴らしさを見せつけられるごとに、あなたは私から遠ざかっていく」

「殿下は公正な方ですわ。わたくしはそれをよく存じております。神の恩寵たる王太子さまに申し上げます。わたくしは正しい結婚を望んでいるのです」

女にここまで言わせてもまだ強要するのなら、心からその女を愛してはいないということだ。ところが彼はいささかもひるまなかつた。

「あなたの言う『正しい結婚』とは？」

「えっ……」

「夫君にしかるべき地位を授けてほしいということですか？」

王太子の愛妾になるかわりに、サファイージャの夫には褒賞を与える——つまり彼は、サファイージャが見返りを期待していると思っただのだ。愛する夫へのせめてもの罪滅ぼしに。あるいは王太子の寵を受けることで、夫を助けるために。それでサファイージャが言いなりになるなら、そうしてもいいと考えたのだろう。

ふざけるな、と言いたかった。なぜわざわざ愛人をやらねばならないんだ。今はこんな姿でも、魔女の証たる黒いローブさえ身にまとっていれば、クアイツとだって対等に渡り合えるのに！

「ただひとりの妻でなければ、いやだ……嫌でございます。よそに愛人を持つようなやつも願わば……ですわ」

逆上のあまり少し地が出てしまった。

「翻弄されればなしなのが悔しい。せめて一矢報いてやりたかった。」

「私は構いませんが……それならあなたの夫君はどうなるのです？ 手段を選ばずに別れさせてしまってもいいのですか？ 愛する人と離ればなれにされて、あなたは耐えられるのですか？」

「……へ？」

なんでそんなことを聞くのか。まるで本気でサファイージャと結婚する方法を模索しているように聞こえる。……いや、まさか？

「つまり……あなたを正妃にお迎えもしますし……時々あなたはあなたの元ご主人に会わせてさしあげても……いえ。今のは聞かなかったことにしてください。そんなこと、私が耐えられない。でも、ああ……あなたがどうしてもおっしゃるのなら、どうか私をうまくだましてください。どんなに私が疑っても、最後までそんな関係は一度もなかったと……」

「……お、王太子さま？」

もしかしてお酒でも飲んでいるのだろうかと思いつつ、さんざん重ねた唇の味を思い出して、いや素面だよな、と心の中で否定した。

誰が実際に妃の座にすえろと言った。

これだけ力いっぱい断っているのに、なんでそういう話になるんだ！

ぽかんとクアイツを見上げると、彼の乱れた衣服が目についた。クラヴァットが抜かれ、豪華絢爛なベストのボタンがなかばまで外されて、胸元だけが露出している。というか、近い。鎖骨のくぼみやしっかりとした胸筋が見分けられるほどだ。

なんてきれいな男なんだろう。宮廷で顔を合わせるたびに、無邪気にそう思っていた。「とにかく、遊びや気まぐれではないですから」

にっこりと微笑まれても、サファイージャは呆然とするだけだった。心臓だけがやたらに速く脈打っている。

憧れがなかったわけではない。一度でいいからダンスを申し込まれてみたいと思っただけでもある。そのクアイツが、遊びや気まぐれではなく、サファイージャを妃きざいに迎えたいという。

……って、そんなわけあるか。本気にしてどうする！

サファイージャは、喜んでしまいそうになる自分を精一杯抑えつけた。

胸が苦しくてたまらない。

ただの気まぐれで適当なことを言われているとしか思えないのに、なぜか素直に受け入れてしまいうような自分が情けなかった。

もろ肌を脱いだ肩に冷気がしみる。震える体に、ばさりとやさしく毛布をかぶせられた。

サファイージャが呆然と見守る中、クアイツは整った腹筋の下を覆う脚衣を脱いだ。

硬く立ち上がったモノが現れる。それは、うるわしの王太子にはまったくそぐわない卑猥さだった。

同じ毛布にくるまりながら、クアイツは冷えきった手でサファイージャの頬に触れた。顔を真正面に向けさせ、ひたいをこつんと合わせて、好きです、と甘くささやく。

「私のただひとりの妻になってください」

緋色ひいろの瞳に見つめられて、サファイージャは動けなくなった。

ただ心臓だけがドキドキと鳴っている。痛いくらいに胸を焦こげつかせるのが、恐怖なのか歓喜なのか、悲しさなのか憧れなのか、自分でももう分からない。

くちづけられて、自然とまぶたが下りる。

仰向けに押しつぶされて息もできない。

突然、下腹部にひどい痛みが走った。何かが無理にひだを割り広げながら入ってきた。

「……、狭い」

薄膜が侵入を必死に拒んでいるのが分かる。

「い、た……っ！ 痛、痛いって……！」

思わず声が出してしまった。硬い胸板を必死に押し返すが、びくともしない。

「……少し、入りました。けど……いくらなんでも、こんな……」

クアイツが布団を撥はねのけて、足の付け根を凝視する。耐えがたいはずかしめだ。彼の言うとおり、付け根の間に先端がまるごと呑み込まれていた。痛みで目の前がくらくらする。

「あなたは……その、『白い結婚』をされていたのですか……？ いや、まさか……まだ婚姻

前……？」

つまり処女かと聞いているのだ。

そのとおりだよばか野郎！

「だから、体だけはやれな……あげられませんか、申しました、のに……」

息がうまくできない。きれぎれに言うと、彼は今日見せた中で一番妖艶な笑みを浮かべ、頬にキスをしてきた。

何度も何度もくちづけを繰り返しながら、熱のこもった目で見つめてくる。

「やはりあなたは私の運命の人だ……」

私の命運は今日で尽きたけどな！

もう開き直ってののしってやろうかとも思ったが、痛みでもうろうとして、うまく声が出なかった。

中断していた城門破りが再開された。奥までギリギリと満たされて、別の苦痛で涙が浮いた。

目の前にあるクアイツの美しい顔が苦悶にゆがむ。痛いのはこっちだつての。

「きれいで凛としていて……私に媚びないあなたも魅力的でしたが、苦しそうなあなたにもそそられます」

奥深くまでもぐりこんだ塊がヌルリと引き抜かれる。

中のひだがこすれて、背中がのけぞった。溶けてしまいそうほど気持ちいい。

……違う、気持ちよくなてない。

必死に体をそらして快感から逃げようとしたが、ふたたび深く刺し貫かれて声が漏れた。

「あああ……！ん、んん、……あああ……!!」

ゆっくりとゆさぶられる感覚がたまらない。

痛みとびれがツキツキと入り口のあたりをさいなんだ。慣れるにつれて快感が体の奥からわい

てきて、苦痛が真っ白に塗りつぶされる。

苦しいはずなのに、蜜のような甘さがおなかの奥にたまり始めた。それが背骨をとろかし、ひどいめまいを起こさせる。

指とは比べものにならない重量に圧迫されて、ひだのあちこちが引き伸ばされる。ジュブジュブと耳をふさぎたくなるような音がした。

とても受け入れきれないほどの大きさのそれが中を行き来するたびに体がくねり、唇がだらしなく開いてしまう。

「お辛くはないですか」

「……つつら、い……」

と言いつつも、快感が抑えられない。

様子をうかがうように浅い出し入れを繰り返していたクアイツが笑みをこぼす。かすむ視界の中で、その笑顔はやけにきらきらして見えた。

「すみません、笑ったりして。でも、嬉しくてたまらないのです。これでもうあなたは私の物ですから」

勝手に決めるんじゃない。

抗議したかったのに、代わりに出たのは情けないあえぎ声だった。

「や、……ほう、……う、んんん……」

どろどろに溶けた中をグチュグチュと突き崩されて、太ももが激しく震えた。知らず知らずのう

ちに足をクアイツの腰に回して、これでもかというくらい巻きつけていた。

「……もつと奥がいいんですか？ 仕方のない人ですね……そんなに締め付けられては、私も保ちそうにないのですが……」

「ち、ちが、締めてな……っ」

「こんなに足を絡めてきているのに？ 嘘はいけませんよ。足りないんでしょう？ 満足いくまでしてあげますから」

「ん、ん、……っあ……っ！」

そこすごくいい、と悲鳴を上げそうになった。でも、最後に残ったひとかけらの理性がサファイジャを押し留めた。

ふわふわの甘い空気に脳ごと溶かされたような状態で、サファイジャはぼんやり、もうダメだ……と思った。

免職、火刑、異端審問、魔女裁判……

ぐるぐると回る思考の片隅で、ふと毒物の存在を思い出す。

スカートの一部に縫いつけた小さな袋を引きちぎろうと手を伸ばしたが、指が一本通る穴を開けたところで手首をつかまれた。

「これが毒ですか。物騒なものをお持ちですね。どこで手に入れたんですか？」

自分で調べました、とはさすがに言えない。サファイジャは自分の手落ちを悟った。べつだん特殊な薬ではないが、詳細に分析されたら出所を特定されるかもしれない。

「ひゃっ……、あ、で、出入りの薬師から……化粧品と、一緒にイツ！……」

「これは没収しておきますね。神の御前で、あまり物騒なことを言うものではありませんよ」

お前の信仰する神なぞ関係ないわ、こちとら魔女だっつうの。

異教徒のサファイジャには、フロライユ王国の国教である世教せいぎょうの自害ほっどのルールなど関係ない。

そんなことを考えていると、王太子はふいに根元まで押し貫つらぬいた。

「んんんッ……っ！」

たまらずのどやあごまでのけぞらせて、グラグラする視界に目を細める。

「いや、あ、あ、あぁ……っ！」

ひどく感じるところを立て続けに突かれて、太ももが引きつってしまふ。激しい上下運動に、泉のようにわき出る体液がこぼりとはかなくこぼれて散った。

「うう、くう、ううううっ……っ！」

もつと激しくされたいと熱望しつっ、それとは裏腹にもうやめてほしいと恐怖した。これ以上さられたらおかしくなる。死んでしまふ。戻ってこれなくなってしまう。

いつの間にか玉の汗がおなかにも胸にも浮いて、全身がしっとり濡ぬれていた。熱くて苦しくてたまらない、なのにどうしようもないほど気持ちいい。

「不思議なものですね。こんなに感じやすいあなたが乙女のままだったなんて」

サファイジャは瞬間的にかつとなつた。今、一番言われたくないことだった。みだりがわしくあ

えがされているだけでも耐えがたいのに、わざわざその事実を突き付けてくる彼の意地の悪さに腹が立った。

「お、うたいしさまに、関係ありません、……んんっ……！」

急にペースが速まって、倍以上の速度で奥を突かれた。呼吸が追いつかず、ヒクリとのどが痙攣する。

「名前で呼んでくれませんか」

「嫌……あ、あつ、いや、ああつ！」

「クアイツ、と。あなたの声で聞きたいのです。でないとやめませんよ」

痛いぐらい強く突き上げられて、苦悶の涙が浮かんだ。

「わ、分かったわ、言う、言うからっ……！ く、……あ、アイツ、さま、あ、ああつ」

「おや、もう舌も回らないようですね。かわいらしい」

からかうような言い草に、サファイージャは焼けるような羞恥を味わった。

もう嫌だ、こんなはずかしめは受けたくない。そう思うのに逃げ場がない。

「……いくらでもあふれてきますね。敏感なことです。どこかで教えられたのではないかと疑いたくなります」

取り澄ました懇篤な微笑みばかり浮かべていた王太子の顔が、ふとかげった。

思わずゾクリとするような暗さだ。

「あなたの恋人には、キスくらい許したのですか？」

尋ねられて困惑してしまふ。

いもしない恋人に、どうやってキスを許せというのか。

彼の長い指が唇の上をなぞる。

「そうでなければこれほどみだらな体にはなりませんよね。何度許したんですか？ どのぐらい深くくちづけたんです？ 教えてください」

ええい、わけの分からないことを言うな！ 泣きそうな顔もするんじゃない！

まるで癒えない傷を負わされたと言わんばかりだ。ひどいことをされているのはこちらのほうなのに。

くすぐる手つきがもどかしい。ぴりぴりと甘苦い、嫉妬まじりの乱雑な動きで、唇をもてあそばれる。

「何度もしたんでしょう？ ねえ？」

見とれるような甘い笑顔で問いかけてくるが、目は少しも笑っていないかった。

「教えてくれないのですか？ 悲しいですね。もつとも、答えていただけなくてよかったのかもしれない。ひとつひとつ指折り数えられては、あなたの恋人を殺したくなりますし」

——怖い。

かりにも一国の王になるうかという男が言っているいい冗談じゃない。

足を高く持ち上げられ、苛烈に中を突き上げられる。手加減なしの挿入をされて、たまらずサファイージャは身悶えた。

どうしてこんな、嫌なのに、嫌で嫌で仕方ないのに。

中を深くえぐられるたびに、心のどこかもえぐりとられていくような気がした。

「ひ、う、ああっ……………」

肉を打ち付ける音が響き、行き止まりへと到達するたびに足の先までしびれた。もどかしい熱のせいでふらふらと足が踊る。より深く呑み込もうと体が必死になっているのだ。よりよって自分がそんなふうに浅ましい快感を求めて頭を空っぽにしているなんて、とても信じられなかった。

「何もかも私が初めてだと言ってください。嘘でも構いませんから。あなたがそうおっしゃるのなら、私はそれにすぎりませんから」

低くささやかれて、くすぐったくなつた。次から次へと舌の回る男だ。

ある種の社交辞令だと分かっているのに、迫真の演技に引き込まれそうになる。本当にクアイツが初めてだと告げたら、カーネリアンの瞳を輝かせて喜んでくれるかもしれない。

「し、してな…………一度も、そんなこと…………っ、初めては、ぜんぶっ…………あ、う、…………なにもかも、王太子さまに、ささげました…………」

「…………こんなにいやらしい体を、誰にも触れさせなかつたんですか？」

「んんっ…………、あ、あ、はあっ、やああっ…………！」

快感のポイントを何度も押されて、びくびくと腰が跳ねた。肩をこわばらせてそれに耐える。毒のようなしびれがじわりとおなかの奥に広がる。

「…………本当にみだらな体だ。よすぎてわれを忘れそうになります。これがまつさらな体だつたなん

て、信じられませんか」

太い親指が歯列のすき間に割って入り、奥のほうまで挿し込まれた。

口に含まされた指の節が、やわらかい粘膜をヌブヌブと蹂躪する。

「んっ…………く、ふうっ…………」

なめらかな指の腹が舌の上をすべる感触に、サファイージャはぞくぞくと身悶えた。ただ指をくわえ込まれているだけなのに、なぜかいやらしく感じた。くさびを打ち込まれた下半身がうずき、狂おしいほど熱を放つ。

深いくちづけの最中のような忘我の境地に追いやられて、与えられた指を夢中でむさぼつた。

「おいしそうに召し上がりますね。しつとりと吸い付いてきて素敵です」

すぐ耳元でからかうような笑い声でした。

甘いささやきと同時に腰を使われて、快感が何倍にも増していく。

「こんなふうにして奉仕されたら、男はひとたまりもないでしょうね？」

「…………っ、ん、ぐっうっ……………」

舌の付け根まで容赦なく指先を突き入れられて、サファイージャはえさきそうになった。

苦痛に反応した蜜口が、クアイツのものをぎゅっと締め付ける。ゆつくりと中を割り開いていく肉にこれでもかというくらい巻きつき、奥深くから震えるほどの官能を引きずり出した。

ふやけた指が口から引き抜かれた。唾液で濡れた唇に、クアイツの舌が絡みつく。敏感になった口内をやわらかいものに撫で回されて、頭の中がふわふわした。

気持ちいいだなんて認めたくない。なのにいやらしく唇を重ねられると、つい従順に口を開け、ひな鳥のように受け入れてしまう。舌同士をこすり合わせるたびに、下腹部がズクリとひどく反応する。

充血しきったひだを執拗にえぐられて、目の前が遠くなった。突き入れられる衝撃で背中が弓なりにしなる。

「やっぱり感触のいい唇だ……この舌は男を知り尽くしているかのようですね。そうとしか思えません」

「ひ、あ……！」

体内にズプリと長いものが押し込められて、のけぞりながら腰を浮かせた。ひゅつと強く息を吸い込んだ拍子に肺がふくらみ、突き出した胸郭の上で胸がゆれる。

「みだらな体だ。はやくイキたいですか？ 胸を突き出して誘うなんて、心得てますね」

「ちっがつ……、あ、つう……！」

腰をくねらせて身悶えるサファイジャを、クアイツは容赦なくつかまえ、ズンと深く刺し貫いた。荒っぽい動きがサファイジャの胸を締め付ける。

そんな心得などない。

入れられているところからにじみ出る血を見れば、経験などないのは分かるはずなのに。

「わた……んどうに、はっ、じめて、でっ……！」

王太子は高潔な人格にまったく似合わない皮肉な笑みを浮かべてみせた。

「私のお願いを聞いてくれるなんて、やさしいですね。少し安らかな気持ちになりました。……でも、あなたには悪いのですが、そんなところにどうしても惹かれてしまいます」

執拗に舐めとられている唇が熱を帯びていた。感覚がなくなりそうほどむさぼられているのに、充血した中をひと突きされるたび、キスのやわらかさに腰が砕ける。

「んあ、……ん、んん、んむっ……むう……」

舌先を吸われながら下腹部の感じるところを何度も押されて、気が遠くなりかける。もう何も考えられなかった。

乱れた息をつきながら、どこか他人事のように目の前で起きる出来事をながめる。

荒々しい動きで体を突かれ、脳裏で小さな光がまたたく。ひっきりなしに内臓をゆさぶられ、声もかすれてしまう。はしたなく溶ける体が、甘やかな泥沼にズブズブと沈み、落ちていった。

「うあ……あつ、ああ……！！ んんっ……んくうっ……うっああ……！」

唇をついばまれて、グラリと眼前が傾いた。下から休みなく愉悦を送り込まれて、中が熱くうるおつていく。

もう引き返せないくらい高ぶっていた。今にもひだが破裂しそうなほど感じやすくなっている。魔女としての自意識が消し飛んで、サファイジャはいつしかはかなく手折られるだけの貴族令嬢になりきっていた。すぎすぎするこめかみに伝う涙も、別の誰かを演じていると思えば抵抗なく受け入れることができた。

クアイツも最初に言っていたではないか。これは夢なのだ。

「……ヒクついてますよ」

激しく抽送されるうちにふくれ上がった情欲は、限界に達しかけていた。

「もうイキそうなんでしょう？ いいですよ。ほしいとおっしゃるのでしたら、最後までしてさしあげます」

耳の裏をねっとり舐め上げられ、一瞬呼吸さえ忘れて体を引きつらせた。

吐息がかかるだけで意識が飛びそうになる。

「解放されたいでしょう？ さあ……かわいいおねだりを聞かせてください……」

「し……、」

言ったらダメだと、戒める声が出た。

しかし聞こえないふりをして、最後まで守っていた一線を越えた。

「して……ください……っ！」

絶対に負けない、と決めていた。自分から求めたりなんかするものかと固く誓っていた。

なのに、もうすべてを手放してもよくなっていた。

「いかせてほしいんですよね？」

「そう、……いかせて、……ほしっ……から……！」

「かわいがってくださいって言えますか？」

さすがに少しためらった。いたづられているようで気に入らない。

けんめいに悔しさをこらえていると、急かすように何度も突き入れられた。根元までグブリと押

し入れられ、体中に戦慄が走る。

いきそう、なのに、いかせてもらえない。

あと少しのところまでできているのに、感じるポイントをわざと外されて半狂乱になった。

「あう……、か、かわいがってくださいっ！」

屈辱と期待がぐちゃぐちゃに入りまじった最低の気分、言われたとおりのセリフを口にした。

「……よくできましたね。ご褒美をさしあげなければ……」

打ち込まれたくさびの切っ先が中をひっかき、ゴリゴリとこすり上げた。途方もないしびれが背骨を貫き、ジンジンとしたうずきに苦しくなる。

激しい動きで連続して穿たれ、何かが崩壊しそうだった。速度を速めて打ち付けてくるのがたまらなく気持ちいい。

目をつぶって耐えていると、体の奥から雪崩のように快感が突き抜けた。

「あ、あああ、……つく、う、つ、……ッ！」

真っ白な閃光が弾けて、内ももやおなか、肩やつま先がめちゃくちゃに跳ねた。

「……く、私も、もう保ちません……」

快感の洪水の中で、愛しているだとかかわいいたとか、意味のないことをささやかれた。

やがて、クアイツのものが中で激しくヒクついているのを感じた。

放出されているのだ、とぼんやり思う。

ビュクリと液体がほとぼしる感覚に、体の奥がかすかに震えた。